

## 試験研究は今 No. 741

### ー北海道から国際貢献 国際協力機構（JICA）の研修の受け入れー

○はじめに

水産試験場では、国際協力機構(JICA)が実施する研修事業の受け入れを行っています。平成22年から3年連続してモロッコ王国の水産研究所の研究員を対象とした「総合分野型水産資源評価研修」を、平成23年と24年には、アフリカやアジア諸国などから集まった研修員を対象に、自国の沿岸漁業の持続的開発と普及振興に貢献できる能力をもった人材を育成することを目的とした「持続可能な沿岸漁業」研修を道庁・水産技術普及指導所、北海道大学と共同で行いました。

○「総合分野型水産資源評価研修」研修

この研修では、北アフリカのモロッコ王国の国立漁業研究所で水産資源の評価や管理に携わる研究員（のべ8名）を対象に、水産試験場で実施している最新の計量魚群探知機を用いた調査の実際や資源評価への応用などを講義しました。

○「持続可能な沿岸漁業」研修

10月末から11月にかけてブラジル、コモロ、ジブチ、ガーナ、ケニア、コンゴ共和国、サントメ・プリンシペ、スリランカ、セネガル、タイ、マーシャル、ドミニカ国、のべ12カ国、20名の研修員が参加しました。この研修では漁業や資源調査の方法、水産試験場が行っている資源評価とその結果に基づいて実践されている資源管理の内容とその成果について、またサケマス類、ホタテ、シジミ、マツカワの増養殖技術と盛りだくさんの内容を講義しました。また、余市漁業協同組合さんと小樽市漁業協同組合さんにもご協力いただき、組合の市場と冷凍工場やホタテ養殖の現場を見学させていただきました。研修生の出身国には漁業協同組合の制度がなく、日本独自の優れた仕組みに皆さん非常に強い関心があったようです。研修後の感想でも、漁業協同組合の制度を自国に導入してみたいという声が聞かれました。

研修を通じてFAO（国連食糧農業機関）が作成した「責任ある漁業のための行動規範」が日本、特に北海道でどのように取り組まれ、実践されているのかを理解してもらい、研修員が自国で「持続可能な沿岸漁業」を実現するためにどのようなことに取り組んだら良いか考えてもらいました。

（中央水産試験場 資源管理部 志田 修）



えびかごの構造について説明を聞く研修員



耳石を使った年齢査定の方法を説明中！！